
こてつ物語 5

yuki

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

こてつ物語5

【Nコード】

N8627S

【作者名】

yuki

【あらすじ】

こてつ物語の五作目。

ハルオは刃物を持つようにはなったものの、生来の性格からか、実力を出し切る事が出来ない。そんな中、ハルオの出生を知った関口が、ハルオと土間を潰すために香を利用しようと画策し始める。

この話は自らのブログにて連載後、小説&投稿屋様に掲載していません。

「あれ？ 土間さん、またいらしてたんですか？」

クラブドマンナの店の奥、従業員控室のさらに奥まった所に小さな事務室がある。そこで土間はパソコンの表示を見ながら電卓をたたいていた。その前にはノートや印刷された各種リストが広げられている。

「どうしても気になってね。この季節から年末年始にかけては書き入れ時だもの。ここで気を緩めるわけにはいかないわ」土間は日頃店を任せている実質上のママに資料から目を外すことなく答えた。

華風組の組長となってからは、仲居の仕事もそれまでの半分に、「ドマンナ」の経営は信頼を寄せている、現在ママ同然となっている従業員に任せる時間が長くなっていった。

だが、ここ最近、土間は「ドマンナ」の様子を見に来ることが多くなっている。少し前は組長の仕事がつましく回らずストレスがたまると顔を出していたのだが、最近はそういう訳でもなさそうだ。

土間はほとんど無意識に、銀のシガレットケースから出したタバコをくわえ、ライターの火を付けようとしてその手を止めた。

「事務所は禁煙だったかしら？」

「いえ、うちはまだです。勤務中は従業員は吸わせないようにしていますが」

「そう、ちよつと吸わせてもらうわ。最近は安心して吸えるところがすっかり減っちゃって」土間はホツとしたようにタバコに火をつけた。

「うちでも禁煙席を設けましたからねえ。時代の流れです」

「その禁煙席の利用状況はどう？」

「おおむね好評ですね。うちは女性の固定客も多いですから。今後は席の数も増やして、時間制限の枠も広げようかと思っています」

「吸う人と吸わない人の距離感が難しいわね。空調機器も新しい物

に変えた方がいいかしら？」

「そうしていただけると助かります。あの、土間さん、最近タバコの量、増えてませんか？」

あまり意識はしていなかったが、そういえば増えたかもしれない。今日も稽古中にやや息が切れた。

「そうかもしれないわね」

「差し出がましいかもしれませんが、身体によくありませんよ。組でも吸ってらっしゃるんでしょう？」

身体に悪いか。嗜好品はたいてい身体に悪い。命をさらしておいで日常の体調に気をつけるなんて何だか間の抜けている気もするが、身体が動かないのはもっと困る。酒は飲みやすい環境から離れればコントロールしやすいが、タバコは持ち歩く事が出来る分、つい、手が伸びてしまう。

「ありがとう。気を付けるわ。吸うと落ち着けるものだから、つい」
「なにか、気にかかっていることでもあるんですか？ このところ店にもよく顔を出していますし」

気にかかるか。いや、気にかけてはいけない事だ。あの子に自分がかかわってもいい事なんて一つもない。

土間は頭に浮かぶハルオの姿を無理やり心から追い出した。

「何でもないわ。店を放つてばかりいると心配になるだけ。気にしないで」

そう言うと土間はまた、パソコンの画面に集中した。

そのハルオの事で良平は悩んでいた。ハルオを仕込むのがどうもうまくいかないのである。

ハルオの性格も気質も十分に理解している。刃物嫌いは相変わら
ずだが、全くの臆病者かと言えばそんな訳ではない。無理に相手に
向かつては行かないだけで、冷静に状況を見極める判断力など、優
れているくらいだ。

反射神経もいい、すばしっこさもある。逃げや尾行が得意なだけ
あつて、持久力もなかなかだ。

だからこそ是非、仕込んでみたいと常々思つてはいたのだが、い
ざやってみると、ハルオの能力を引つ張り出せている実感がない。
ハルオを本気にさせられないのだ。

ハルオはむやみな怒りや衝動で動くタイプではない。どもりが出
るのは極端に相手に気負つてしまうからで、相手の事が見えなくな
るほどの感情に駆られた時は、どもる事は無くなっている。日ごろ
はむしろ冷静な方だろう。

こういつ奴を本気にさせるのは、意外に難しかったんだな。

ハルオは決して不真面目ではない。苦手な事にも真面目に取り組
む事が出来る。

しかし、その生真面目さが邪魔をして、ハルオの動きに制限がか
かっているような、そんな印象がぬぐえない。

土間さんは俺を指導者タイプかもしれないと言つたが、才能を見
抜く目を持つのと、実際に指導するのでは天と地ほどの違いがあ
るようだ。どうすればハルオに本気で向かつてこさせることが出来
るのだろうか？

攻撃は最大の防御。言葉で言うのはたやすいが、これを身体で理
解してもらつためには本気でかかつてもらつしかない。なまじ逃れ
るのが極端に上手いだけに、先立ってしかけていく必要性を理解さ

せにくいのだ。

顔見知りの俺が相手では、ハルオは本気になれないのだろうか？
やはり土間さんにあのまま指導を続けてもらった方が良かったんじゃないか？
ハルオの才能を本当に引き出せない自分に良平はやや、苛立ってしまう。

勿論その苛立ちはハルオにも伝わっていた。しかもそれが自分への自信喪失につながってしまうのが、ハルオらしいところ。ハルオ自身は真剣だ。決して手を抜いたり、いい加減な気持ちでやっているつもりはない。

思い切って向かえといわれれば、本当に正面切って真っ直ぐ向かってくる。これでよけられなければ、馬鹿だ。

持ち味の反射神経は全く生かされる事がない。何せ身体が、相手が避けてくれることを前提に動いている。

ハルオ向けに木刀を短刀のサイズに切って持たせているので、動きは軽快で、良平が向かって行っても物の見事にかわされてしまう。あまり喧嘩の稽古にはなっていないのが現実だ。

本当なら電光石火の良平を、軽々とかわしてしまうこと自体が、たいしたことなのだが。

それで完全に身の安全が図れるのなら、それはそれで越したことはないが、何せ喧嘩には遠慮もルールもない。

相手が命懸けで立ち向かった時に、どんな突発事態が起こるか分からない。刃物を手にした以上は、常にそこを頭に入れておく必要がある。命の危機が迫った時の最低限の攻撃態勢は身体にたたき込まみたい。

刃物嫌いのハルオにドスを毎日持たせるのも負担が重そうだ。そんな事を考えてしまう良平にも甘いところがある。おかげで稽古は遅々として進む気配が無かった。

「こんにちは」

明るい声がして倉田は振り返った。作業中の手がとまる。

「おや、また来てくれたのかい？」倉田は顔をのぞかせている香に機嫌よく答えてやった。

「今日は私が炊事当番だったの。で、煮物のおすそ分け」香はトートバッグを掲げて見せる。

「いつも悪いな。一人だと出来合いの物ばかりになるから助かるよ」倉田は道具を手放して、身体の誇りをはらいながら、仕事場から座敷へと上がる。香は勝手知ったる様子で台所へ向かった。

「私もつい、作り過ぎるから。二人分ってまだ慣れなくて。私の味付けじゃ、濃いかもしれないけど」そういいながらタッパーに入っている煮物を小鍋に移しかえる。

香と倉田では祖父と孫ほどの年の差があるのだから、味の好みはかなり違うはずだが、倉田は時折香が持つてくる料理に注文をつけたことは無い。

「礼似さんというんだったな。彼氏の一人も作れば、そういうことはすぐに慣れるだろうに。爺さん相手に食べさせてばかりじゃつまらんだろう？」

「倉田さんぐらいの年の人って、二言目にはそういう話に持つて行くのね。そういうのはね、今時はセクハラって言われるんだから」香は口をとがらせた。

「そう年寄りをいじめないでくれよ。こんな心配されるのも若いうちだ。俺なんか、茶飲み友達の婆さんさえ、誰にも紹介されることは無いぞ」

そう倉田が言うと二人は一緒に笑いあった。

あの騒動以来、香は時々倉田の工房を訪れるようになった。奇妙

なしがらみがもとで、かかわりあつた二人だが、父親を早く失い、母親は服役を繰り返した揚句姿を消してしまった香にとつて、祖父のような年周りの倉田はいつの間にか心の落ち着ける存在になつていた。

「ねえ、倉田さんは足を洗う時には、すぐにやめられた？ 不安になつたりしなかった？」香が真面目な口調になつて聞いてきた。

「なんだ？ 足を洗いたいなら、早い方がいいぞ。時間つてものは意外と速く過ぎるもんだ。そういうことは早ければ早いほどいい」倉田も促すような口調になる。

「違うの。私がすぐに足を洗いたいつて訳じゃないの。ただ、ハルオさんが私がきっかけで人生変わっちゃいそうだから。刃物が嫌いな人に、結局私が刃物を握らせたんだもの。生まれた時から組で育つと、もう、足は洗えないものかしら？」

「環境に影響は受けるだろうが。最後は本人次第だろう。実際堅気の世界も厳しいもんだ。そこに残り続ける意味と理由がなければ、すぐに挫折しちまう」

ハルオは真柴組の事を、自分の唯一無二の家庭だと思つて暮らしている。そこから足を洗うのは難しいのだろう。

「どうして人を殺す道具を持たないと、自分や仲間の身を守れないのかしら」香はため息交じりに言った。

「そこがこの稼業の因果な所だ。相手から身を守るために武器を持つ。その武器から身を守ろうと、相手もさらに武器を手にする。なんでそんな事になるかと言えば、結局は見栄と欲さ。顔を張つたり、シマを取りあつたり。全てはそれが原因だ。世の中の戦争だつて、きつかけはそう変わりやしない。国や地域の見栄や、市民の欲から起こつている。堅気の世界だつて欲望に変わりはない。いわば人間の本能さ」

「でも、堅気なら普通の人は武器なんていらないわよ」

「道具ばかりが武器じゃない。金や権力だつて立派な武器だ。情報や、人心の操作だつて武器になる。世間体つて奴だ。堅気はそうい

うものをうまくすりぬけなければ生きていけない。そのために自分の居場所を作って知恵を絞るのさ。それがうまくいかない奴らが、こんな世界に流れて来るんだ。この世界は世の中の縮図かもしれない」

「どっちが本当に正しいのかしら？」

「俺は綺麗事は言えない。若いあんたには辛いだろうが、見る角度が違っただけで、どっちも正しいとは言い切れない。ただ、手足や命は失ってしまえば取り返しがつかない。だから俺は、若いあんた達には足を洗う事を勧めるのさ。押しつけることはできないがね」

そう言っただ倉田は、香が入れてくれたお茶を、ずっと飲み干した。

こてつは、ソファアの上で気持ち良く昼寝をしていた。

由美が会長と出かけるために昼ごろからかなり長めの散歩をして、さらに由美と一緒に公園を走りまわったので、すっかり満足して寝入っていたのである。

出かける前に、タエと由美は万全の態勢を敷いていた。こてつに留守番をさせる下準備だ。

こてつは、極端なほど、由美になついている。由美も我が子同然にこてつを扱うので、まるで一心同体のようになっていく。それだけに、こてつは、由美と離れる時間を過ごすのがすこぶる苦手のようだ。

そんなこてつを置いて由美が出かけるときは、とにかく気を使った。由美がいない事に不安を感じないようにと、あの手この手の策が練られる。

まず、こてつが安心するように、いつも以上にスキンシップをとっておいた。しっかり身体も動かして、不満を残さないようにした。お気に入りのおもちゃは目に入りやすい所に置かれ、いつも由美が座っているソファアにいつもの毛布をかけて寝かつけた。近くには由美の臭いが付いているであろう、タオルや小物も置いてある。

日ごろ由美がお気に入りによく聞いている音楽を静かに流し、人の気配を感じるように、タエはこまめにこてつの様子を覗いていた。そういった準備が功を奏したのか、こてつはしばらく、気持ちよさげにぐっすりと眠ってくれていた。

日がやや傾いてきた。今日も会長は遅くなるのだろう。食事もタエが帰って、遅くにとるに違いない。それまで奥様が空腹でいては忍びないので、タエは夕方に由美が軽く食べられるような食事を用意する。

夕食の下ごしらえも同時に行うので、ついつい、台所につきつきりになってしまう。

そんな時に限って、人の気配のなさに気付いたのか、こてつは目を覚ましたようだ。

いつもの匂い。いつもの毛布のぬくもり。こてつはやや寝ぼけた足取りでソファーから降り、目についたおもちゃをかじる。しかし、いつもの優しい声がない。庭を覗いても人気がない。物音のする台所へと向かう。

夕エは下ごしらえの真つ最中で、忙しく包丁を動かしている。こてつが覗いている事には気付かない。

いつもならここで、こてつは不安のあまり鳴き出して、軽くパニツクに陥り、夕エは必死でなだめ、帰りついた由美に抱っこをしてみらって、ようやく機嫌が収まるのだが、何故か今日のこてつは、少し寝ぼけた顔のまま、庭を突っ切って生垣からするりと外に出てしまった。

香は礼似の部屋への帰り道で、やたらと悲しげに鳴く犬の声に気がついた。外に出たこてつはようやく自分が置いて行かれた事に気付いた。由美の姿を求めて必死に鳴く。

「どうしたの？ お前迷子？」香はこてつに向かってかがみこみ、頭をなでてやる。

こてつはひたすら鳴き続ける。おかあさんはどこ？ どこに行っただの？

「首輪もしてるし。この辺の子かなあ？」

香はタッパーの中の、少し煮崩れてしまった煮物の欠片をこてつに差し出してみるが、こてつは食べようとはしない。ちがうよお。おやつじゃなくて、おかあさんだよ。おかあさん、どこにいるの？ こてつは鳴き続ける。

「こまったな。お前のおうちはどこかしらね？」

すると頭上からどもった言葉が聞こえた。

「あ、あれ？ こ、こてつ？」

香りが顔を上げると、そこに買い物袋を提げたハルオが立っていた。

「こんにちは。知ってるの？ この犬」香がかがんだまま尋ねた。

「こ、こてつ会長の、か、飼い犬です。な、なんで外に出、出ているんだろっ？」

へえ。これが噂に聞く「こてつ」か。会長の奥様の溺愛する愛犬で、会長にとっても泣き所っていう。

「会長のお宅ってこの辺なの？」

「こ、この辺も何も。め、目の前の塀のむこう、です」

「え？ これ全部、個人の敷地なの？」

目の前には延々と続く古風な塀と、所々に垣根が連なっていた。

垣根の向こうには立派なかわら屋根が見える。

「資料館が何かかと思った」香があまりの広さと、建物のつくりに、ややあきれ気味で見上げていると、こてつがまた、悲しげに鳴き始める。

「よし、よし。今おうちに連れていくからね。ここの入り口ってどこなの？」

「あ、案内しますよ。こ、こつちです」ハルオが玄関の方へ案内しようとするが、肝心のこてつが動かない。

ちがうよお。おうちに、おかあさんは、いないよお。おかあさんに、あいたいんだよう。こてつは鳴くばかりだ。

こてつはいたいたいけな子犬という訳ではないが、何せ会長の愛犬だ。強引な事や手荒い扱いは出来ないの、二人はこてつをなだめすかせながら、少しずつ玄関の方へ誘導していった。

ようやく、もう少しで門にたどり着きそうだというところで、急に目の前に止まった車から、由美が慌てて飛び出してきた。こてつも目ざとく由美の姿をとらえると、全力で由美に飛びついて行く。まるで長い別れの後の抱擁だ。

さっきまでの不満顔はどこへやら。こてつは由美にまわりつき

ながら満面の笑みを振りまいていた。

だいぶ経ってから由美はハルオに気がついた。ハルオと香は会長に頭を下げようとしていたが、由美の後ろで会長が、手で制し、指を口元に当てる。何も言わずにじっとしろということらしい。

由美はハルオににこにこしながら挨拶する。

「まあ、ハルオさん。お久しぶりね」

「ご、御無沙汰、し、していました」

「かわいいお嬢さんと一緒に、お買い物帰りかしら？」由美はハルオの買い物袋を見ておっとりという。

「か、香さんは、ちょ、ちょっととした知り合いです。か、買い物帰りに、ぐ、偶然あつたんです」

「あら、香さんっておっしゃるの？ 初めまして。こてつと遊んでくれたのかしら？」

「え？ まあ。こてつ君が鳴いていたので、声をかけて」

「まあ、こてつったらお迎えに来てくれたのね。いい子ね。お部屋で御褒美をあげましょうね」

あれはお迎えという感じじゃなかったけど。そう思いながらも香もハルオも余計なことは言わずに、こてつと由美を見送った。会長も視線だけを二人に投げかけて、車でさっさと行ってしまった。何だかどつと疲れた気がする。

「会長の奥様って……なんて言うか……マイペースな方なのね……」
マイペースという言葉が正しい表現かどうか自信は無かったが、そんな言葉がつい、香の口に登った。

「まあ、ふ、普通と違う、せ、世界を暮らしている、か、方かもしれない」

そっちの台詞の方があっているような、いないような。

そういえば、香には自分に近付かないでほしいといわれてたんだ。言い終えてからハルオは気がついたが、こてつと由美の世界にのまれて、正直、どっちでもいいような気になってしまった。ばったり

会ったのだって偶然だったんだし。

香の方も思い出しはしたが、今更蒸し返すのもうっとおしくて、
とりあえず忘れている事にしておいた。

「買い物ですか？」香はハルオにありきたりの事を聞いておく。さつき本人もそう言っていたのに。

「ゆ、夕食の材料です。う、うちは住みこみの、く、組員もいますから、け、結構大所帯なんです」

「そうですね。大変ですね」

香が返事をしてしまうと、もう会話が続かない。仕方なく香は一番気にかかっている事をつい、聞いてしまう。

「稽古の方は、うまくいつてるんですか？」

「聞くんじゃない。はつきりそう思うほど、ハルオの表情が曇った。」

「お、俺、度胸がないから」

「やっぱり向いてないんじゃないですか？ 無理しないで、他の方法を考えた方がいいと思うけど」

「ほ、他の事だって、ど、度胸がなければ、に、逃げ腰になって、い、一緒です。こ、これだけは、がんばらないと」

真 面目というか、馬鹿正直というか。どうしてもハルオといると落ち着かなくなる。早いところ退散するか。

「そうですね。じゃあ頑張ってくださいね。それじゃ」香は逃げるようにその場を立ち去った。

ハルオは香の前ではどうにも立つ瀨のない状況に陥るようなめぐりあわせになるらしく、へこむ一方だ。

一層落ち込んだ気分で組に戻ると、御子と良平が、待ちかまえていた。

「な、なんですか？」何かへまでもやっただろうか？

「ちよつと、食事の支度の前に、試したい事があるんだけど」御子が自信満々に言ってきた。

良平と一緒に庭先に出される。短刀代わりの短い木刀と、御子の指先から抜いた小さな結婚指輪。それを良平の木刀の先に引っかける。

「いい？ ハルオはこの指輪を良平から自分の木刀で取って、私に返して頂戴。で、良平は私の指輪をとられないようにするの。まあ、ゲームだと思つて気楽にやってみて。ただし」

御子はここで思いつきり睨みをきかせると

「私の指輪を無くしたら、二人ともどうなるか、分かつてるでしょうね」と、目の光が一瞬にして変わる。二人は息をのんで同時にうなずいた。

「そう。じゃ、始めて見て」御子はそういつて面白そうに見学する。二人はやや緊張気味に対峙した。

これで、ハルオは良平の木刀から逃げ回る訳には行かなくなった。しかも打ち込みに行くのではなく、指輪をすくいとらなくてはならない。これは難しそうだ。

良平も良平で、これはなかなか難題だ。うかつに振り回せば指輪はどこに飛んで行くか分からない。しかし、うまくよけなければ、ハルオの反射神経の良さで、指輪を奪われてしまうだろう。

御子はにこにこ笑いながら二人を眺めている。

この笑顔が変わる瞬間がこわいんだよな！

ハルオも良平も同じことを考えながら、御子のゲームとやらに挑んでみる事になってしまった。

指輪を気にかけてなかなか動けない良平に、まずはハルオから仕掛けて来た。相手をどうにかしようというならともかく、指輪を持ち主に返すという妙な大義名分に支えられて、ハルオはあまりためらわずに良平の木刀を狙う事が出来た。身を下げる良平に楽々追いつき、懐深くに入ってしまう。

良平も必死で指輪をとられまいと、ハルオの木刀を避けて回る。これedyouやく、ハルオが良平を追いかける形になった。ハルオの

すばしつこさがいかになく発揮される。

良平も、本来なら身を守るはずの木刀を、指輪を守るために「かせ」の様にされてしまつて、丸腰よりも辛い事になつてゐる。

まつたく、よく、こんな事を思いついたもんだ。そう、良平は心の中で愚痴つていた。本当に指輪を無くしでもしたら、御子はどれほど怒り狂うか見当もつかない。いやがうえにも真剣にならざる負えなかつた。

しばらく木刀を狙ううちに、良平相手では通り一遍の動きでは、通用しない事にハルオも気がついてきた。

冷静に手を考え始める。実際に、敵となる相手から何かを奪うにはどうすればいいだろう？

結局のところ、良平の弱点と言えば義足の足元だ。特別な義足で弱点をむしる武器にさえしている良平だが、隙があるとすれば、やはり、その頼りになる義足や、それを支えるための反対の足元だろう。動きが自在に利くといつても、バランスには無理があるはずだ。その負担を利用すれば。

ハルオは身体を上へのばして良平の注意を高い所に向けた。指輪の事があるので良平の視線は上に向く。その瞬間、ハルオは一気に身をかがめた。殆んど腹這いに近い。良平も足元に意識を切り替えようとはするが、ハルオの動きが早すぎて、無理なバランスをこらえている足元の動きは追いついていかない。

義足をはらわれそうになつて、良平は利き足にバランスを集中する。つい、腕が不用意に下がる。

腕を上げようと思える間もなく、ハルオが義足をはらわずにそのまま突つ込んできた。

「良平！ うしろ！」御子が叫ぶ。

ハルオは前から突つ込んでいるのに、「うしろ」とはどういうことだ？良平が戸惑ううちにハルオはそのままスライディングでもするよつに、良平の足の間を潜り抜けた。後ろを振り返ろうとするとハルオはすでに身体を起こし、木刀が、指輪目がけてまっすぐにの

びて来る。

後から思えば、素直にハルオに指輪をとらせておけばよかった。良平は思いっきり木刀を振り下ろし、ハルオの木刀をたたき落とそうとした。当然指輪は地面に落ちていく。

それだけでもまずいと思ったのに、体制が崩れた良平はとっさに利き足を踏ん張ったのだが、足にはつきりとした違和感が。

「あー！」ハルオと御子が同時に声を上げた。

良平は、御子の指輪を思いっきり踏んでしまったのである。

一時間後、夕食の席で御子はむくれ顔のままハルオに話しかけた。「だから、これからは打ちあうつもりじゃなく、互いの武器を払いあうつもりで稽古を続けるの。ハルオは型通りの動きじゃ自分を生かせないでしょうから、さっきみたいにトリッキーな動きをいつも考えればいいのよ」

「だったら、初めから払うつもりでやればよかつたんだ。指輪なんか使わずに」良平は仏頂面でつぶやく。

あの直後、指輪に傷もなく丁寧に洗って返してやったのだが、御子は血管を浮き上がらせて怒りをあらわにし、文句と嫌みをさんざん聞かされた拳句、新しいブーツを買ってやる約束までさせられた。計画犯だ。

「それじゃ二人とも本気でやらなかつたでしょ？ ハルオは遠慮しちゃうだろうし、良平は緊張感が足りなくなるし」

自分がやる訳ではないので、御子はさらっと言つてのける。

「あんな予測できない動きをされるんじゃ、さすがに俺でも付いて行けるか自信がないぞ」あの瞬間は完全に動き負けしていた。あれを生かして仕込むというのは想像以上に難しい。良平はそこも気になつていた。

「だから私がいるんじゃない。私はハルオの動きを予測できる。でも、動きと木刀さばきでは良平にはかなわない。だから良平が私の言葉からの確な次の動きを判断すれば、十分ハルオの相手になれる。これは私達の稽古も兼ねているのよ」

確かに今まで良平と御子が一緒に相手に向かう時は、ほとんどぶつつけ本番だった。こんな稽古をしていれば、いざという時も安心だ。

「だいたい、私はちゃんと教えたのに、良平がピンとこないから、指輪を落つことしちゃうんじゃないの」

「ピンと来たってあんなとつさに義足のバランスがとれるかよ。ハルオはそれを分かっているって狙ったんだ。あれを使いこなすのは大変なんだぞ」

君子危うきに近寄らず。食事を終えた組員が居心地悪そうにこそと席を立ち始めた。

二人の口論が始まりかけたところで、ハルオが小さくなって詫びる。

「す、すいません。ひ、卑怯な、や、やり方をして」

二人の視線がハルオに向く。ここで謝られては意味がない。

「いや、相手の弱点を狙うのは基礎の基礎だ。一番いい手だったと思う」

「そうよ、良平のスピードを上回れるハルオならではの手段だったわ。これからそこを生かさなくちゃ」

二人は慌ててフォローするが、ハルオは縮こまってそつとお茶をすすっている。

どれだけ成果を伸ばそうとも、自信につながるのは簡単ではなさそう。御子も良平もハルオの顔色を見てためいきをもらした。

ハルオの稽古はそれからは順調に進んで行った。もともと素質があるうえに、経験も豊富なので動きに機転が利く。御子の指示を聞いてから、とつさに動きを変えたりするので、二人は翻弄されながらの稽古になった。

時にはどっちが稽古されているのか分からない程だ。

しかし、ここまで力を発揮しながらも、ハルオの表情はさえない。むしろ自分への不満を膨らませてさえいるようだ。

「こ。こて先の、う、動きだけ、う、うまくなって、ぜ、全然、強くなった、き、気がしない」

返って精神的には落ち込む一方のようで、逆効果になってしまう。これには困ってしまった。

「刃物嫌いで変に強情なのは土間によく似ているわ。この際、土間に励ましてもらおうかしら？」ついに御子が音をあげた。

「そうしたいのは山々だが。土間さんが承知してくれるか？」良平が尋ねる。

そこも問題だ。土間は自分が親である事がバレルのを嫌って、極端なほどハルオを避けている。

実の親子なのだからハルオが気にならないはずはない。だが、土間は明らかにハルオの話を耳にする事を避け続けている。御子が名前を出そうとするだけで、さっさとその場を離れるほどだ。心配でどうしようもないと公言しているのと同じだ。

最初に稽古をつけた身近な存在として、もっと気軽に接してあげればいいのだが、積もった時間があまりに長過ぎて、かえって普通に接する事が出来なくなっているのかもしれない。

「いっそ親子の名乗りを上げればどうかしら？」御子は古い言い回しをした。

「普通の親子ならそれでいいだろうが。あの二人だと、どうだろうな」良平は首をひねる。

同じ街の組長が、実は自分の実の親で、しかも見た目は女性にもかかわらず、刃物を握りたくないばかりに、性を変えた元男性の父親だった。これはハルオに受け入れられる事実だろうか？

そもそもそれをハルオに知られる事を、土間が耐えられるだろうか？

「土間って、あれで結構、ナイーブなのよねえ。追いつめられるのに弱いつていうか」

御子のため息をつくが、それはそうだろう。そうでなければ性を変えてまで生き方を変えようとは普通思わない。

「ハルオだって、あの姿の人を父と呼べってのは、かなりきつくないか？」

キツイ。それはもう、かなりの無理がある。

「いつそ、母親って事で名乗らせたなら？ なにしる、見た目は女性なんだから」

これこそまさに嘘も方便だろうと御子は思ったのだが

「それで、華風組の組長になった経緯をどう説明する？ ハルオを手放さざる負えなかった事情もだ。つまらない嘘についても、つじつまはすぐに合わなくなる。二人とも返って傷つくぞ」

「そっかあ。血のつながった親子なのにねえ」

御子にしてみれば、血のつながりのある親が、身近な所で心から心配してくれるというのは、それだけで羨ましい限りなのだが、世の中うまくいかないものだ。

「何にしても、土間が逃げ回っているようじゃ、どうしようもないわねえ」

「組が違う以上、無理に接触を計るのも不自然だしな。土間さんがたまにハルオの指導をしてくれれば、少しは親しくなる機会もあるんだろうが」

それはおそらく土間が拒絶するだろう。

「親子そろって不器用なんだから。困ったものね」
ハルオの苦悩を一番理解できるはずの土間の不器用さに、御子は
つい愚痴が出た。

「そんなの、土間にガツンと言ってやればいいじゃない。あんだ、親なんだから、こういう時に助けてやんなさいって」礼似は簡単に言い放った。やっぱりなー、と御子はがっかりする。

あまりあてにはできないが、礼似にも聞いて見ようと御子は礼似の部屋を訪れていた。

「こういうことはデリケートな事なの。ましてあの二人は精神的に不器用なんだから」

「不器用も何も、気になってくるくせに土間がハルオから逃げ回るからうまくいかないでしょ？ いっそ全部バラしてハルオに言いたい事を言わせちゃえば？ お互いすつきりさせればいいじゃない」

「言っただけ言っただからって、すつきりするとは限らないじゃない」
んー。礼似には感覚的に理解しにくい世界だったかなあ。御子は質問を変えてみる。

「じゃあ、礼似がハルオだったら土間に文句がある？」

「文句はともかく、言いたい事はあるでしょ？ なんで自分のために父親のままでないかったのか、自分を手放さずに守る方法をもっと考えられなかったのか、組を出る気は無かったのか、どんな状況でも自分を育ててほしかった、とか」

「で、それを言った後はどうする？」

「は？」

「言いたい事を言った後よ。元父親の女性で、組を一つしよって立っている土間を自分の親として認めて受け入れられる？ それとも突っぱねる？」

「多分ピンとこないだろうなあ」

「でしょ？ ハルオだってそうよ。いきなり親が現れるだけでも動揺するのに、こんなこんがらがった話を聞かされたら、事実として受け止められないわ。で、そういう親から、いきなり指導を受けよ

うって気にもなれないんじゃない？」

「と、言うより、稽古どころじゃないか」女姿の父親をまじまじと見てしまいそうだ。

「土間だつて好きで逃げ回ってる訳じゃない。ハルオを育ててやれなかった負い目もあるだろうし、華風組の問題に巻き込みたくもないだろうし、女の姿で名乗る羽目になれば男をやめた事にも、ちょっとは後悔があるのかも」

「でも、自分で選んだんじゃない」

「選ばざるを得ない部分もあつたかもしれないでしょ？ 他人には分からないわよ。そんな土間に親の責任を振りかざして、ハルオを見てくれなんて言えないわ」

「そうかしら？ 土間つてそんなに弱いかしら？ 確かに「いつ死んでもいい」みたいなところはもってるから、あぶなっかしいのは確かだけど」

「香、あんたも聞いてたんでしょ？ この話はこつ組は勿論、華風組や、真柴組の人間にも秘密だからね。もちろんハルオにも」御子が台所でコーヒーの準備をしているいる香に声をかけた。

聞いてたも何も、すぐ横で堂々と会話をされたら、いやでも耳に入る。かわりたくないと思えば思うほど、どうしてこつ、ハルオの話が私の周りには付いて回るんだろう？

「解ってます。誰にも言いませんよ」

「つて、言うよりも、本当にこれ以上かわりたくない。なまじ、あの二人がどんな顔して真剣を握りあつていたか見てしまっているだけに、その光景が目から離れなくなっている。」

それなのに、これ以上かわつたら、なにか、逃れようのない物にでも捕まりそうな気がしてしまう。

聞かなかつた事にしよう。

香はそう思いながら、無心になるべくカップを睨みつけながら真剣にコーヒーを注いで行った。

人通りの激しい駅前表通りから、ビルの隙間をわずかに入ったところで、関口は男から書類を受け取った。

「これが真柴組のハルオを調べた資料です。こんな奴調べてどうするんですか？関口さん」

関口が懇意にしている情報屋の男は怪訝そうな顔をして尋ねた。

「いや。こいつ、意外と厄介者になるかもしれない気がしたんだ。勘が働いてな」

渡された資料を丹念に目で追って行く。

「常に千里眼や良平の使いっぱしりに近いことをしているな。実働隊としての能力は高そうな奴だ。大きな乱闘に出ても、傷一つ負った事がないのか。乳児の時から組にいたんだな」

関口はハルオの経歴をざっと確認する。乳児の頃に組に預けられて、地元の高校までを出ていた。

「真柴はそういう人間も多いですよ。捨て子や施設上りの人間も積極的に受け入れていきますから」

「しかし乳飲み子の時からいるのは珍しいだろう。真柴の組長の亡き妻が育てたんだろうが、彼女の子ではないはずだ。確か子供は産まなかったはずだ。こいつの両親は調べたのか？」

「それが。不思議とハルオの両親は、いくら調べても情報が出てこないんですよ」

「出てこない？ 誰かが情報を抑えているってことか？」

「おそらく。なにか、訳ありの子だったんですかね？」

組に預けられるような赤ん坊なら、それなりの訳があつて当然だ。しかし情報が出てこないとなると事情が変わる。

この世界で情報を抑えなければならぬ程の訳ならば、これは意外と勘が当たったのかもしれない。

「そうだろうな。悪いがハルオが生まれた頃に真柴夫妻の周辺で、

出産した子供について調べてくれ。どこかで真柴に預けられた子供に辿り着くはずだ」

「それはかまいませんが。こいつ、そんなに気にするほどの奴ですかね？」

情報屋の男は、まだ懐疑的だ。

「あいつが刃物を握った瞬間に、何か普通ではない感じがあった。あいつは何かを持っている。厄介な刀使いになる前に、つぶす必要があるかもしれない。よく調べ直してくれ。頼んだぞ」

関口は懐から追加の調査料を男に手渡した。男はそれを確認すると、すつと雑踏の中に身を消していった。

ハルオの出生についての情報がまとまるまでは意外と時間がかかった。関口の手元に資料が届けられたのは、結局あれから一週間の時間がたつてからだった。

だが、それだけ待つだけのかいがあった。情報屋は開口一番、興奮気味に口火を切った。

「大変です。関口さんの勘は当たってました。こいつ、とんでもない奴の息子です。あの、華風聡次郎の子供でした」

「聡次郎？ あの、血祭り聡次郎の子か？華風組の」

「その通りです。しかも母親は先々代の華風組長の妹でした。これはタダモノじゃないでしょう」

あの聡次郎の子なら、刀使いになる素質は十分にあるはずだ。これは早いところ潰しておかないと後々が厄介な事になる。腕が磨かれてからでは遅いかもしれない。

「それにもう一つ、聡次郎が今何をしているかご存知ですか？」

「いや。妻が逆恨みから刺殺されて以来、刀を置いて行方不明になったと聞いたが。その後の噂は聞かないな」

「土間ですよ」男は声を低くして囁いた。

「何？」

「華風組の土間、富士子ですよ。現在の組長の。彼女は聡次郎です」

「まさか」さすがに関口もこれを冗談とは思わなかったが、すぐには信じられなかった。

「間違いありません。資料にも書いてありますが、聡次郎は妻を亡くした直後に偽名で手術を受けています。ハルオが生まれた総合病院にいた看護師が、その後聡次郎が手術を受けた病院に転職しているんです。その看護師の友人がたまたま出産時期が聡次郎の妻と一緒に、よく、産科に顔を出していたそうです。そこに聡次郎が見舞いに行っていたそうなのですが、手術を受けた男は名前は違っても確かに聡次郎だったそうです」

「しかし、まさか性別を変えるとは」

「誰も考えなかったでしょうね。でも、聡次郎が姿を消したのと、土間が華風組に姿を現した時期がピッタリ一致するんです。それに、土間の名前の富士子ですが、聡次郎の妻の名前と同じなんです。文字まで一緒です。こんな偶然はあり得ないでしょう？」

関口は、倉田を襲った時に土間と刀を合わせている。確かにあの腕前は普通の腕前ではなかった。彼女が聡次郎だとすれば、あの刀の扱い方も納得がいく。こりゃあ、意外な大物が出て来たな。こいつはどうあってもハルオを潰して土間にも精神的なダメージを与えてやろう。妻に死なれて性を変えるほどの奴だ。息子に何かあってもシヨックは大きいだろう。うまくすれば華風組を狙う連中にかなしの売りこみが出るぞ。

「おい、ハルオに何か弱点は無いか？ 決定的な弱みになるような「ありますよ。こいつ、結構惚れっぽいタイプなんです。女に弱いんですよ。今も小娘に気があるようです」

「女か。今時は女を口説けない男も多いが、気弱に見えてなかなかのもんだ。その女は調べたか？」

「調べるまでもありませんよ。関口さんがハルオにちよつかいを出した時に、一緒にいた女です。こてつ組の香って小娘です」

ああ、あの時ハルオがかばおうとした女か。やたらと気が強そうで、元気の良かった、礼似にくつついている小娘。

今時は空威張りはできても、女をかばえるような男も少なくなつた。あれで結構男儀のある奴だ。

そつという男を潰すのも惜しい気はするが、こつちも顔を張る商売だ。しかも先々の厄介者。ここは涙を飲んでもらうとしよう。

「これは女を利用するのが早道だな」関口はゆっくりと考えを巡らせていた。

良平と御子は相変わらずハルオを仕込もつと稽古を重ねてはいたが、肝心のハルオの意気は、上がってくる様子は無かつた。それでも身体にたたき込んでおけば、多少なりともいざという時の備えにはなるだろうと、ハルオのトリッキーな動きを誘うべく、御子は懸命に先読みし、良平もそれを理解しようとする。おかげでハルオ自身の腕はともかく、三人のチームワークは以前よりもずっと向上していた。これはこれでひょうたんから駒が出たようなよい成果だった。

「意外とこれは武器になるかもしれないな。この世界は一匹オオカミが多いし、喧嘩で人と呼吸を合わせるなんてまず、しないだろうからな。意表もつけるし、効率もいい」

御子と良平もハルオに自信をつけさせてやれないもどかしさは残るものの、それなりに一定の成果が出て来た事には満足感を感じていた。

ハルオはハルオで何とか刃物に慣れようと、一人でドスを握りしめては身体の動きを確認しようとするのだが、これが人の体にあつたらと考えてしまうと、脅えと重圧感にさいなまれてしまう。それを頭から振りはらう事が出来ずに、動きが鈍くなってしまうのをどうしても克服できずにいた。

何も考えずに無心になつて握つてしまうと、今度は刃物に頼る気が強くなる。相手に刃物を突きたてれば、すべてから逃れられるような錯覚が襲ってくる。日ごろの冷静さとは別の感覚が勝手に襲いかかってくるのだ。

どうやらこれは自分だけの感覚で、良平や御子には無い事にハルオは気がついていた。だから自分のために二人が懸命になればなるほど、ハルオは自らの力で克服しなければと思つてしまう。困った事にそう思うほどに重圧感が増してくるようだ。理想の自分とかけ離れた心の弱さを余計に重く感じてしまう。

土間さんなら。あの時、自分に刃物を握る勇気を持たせてくれた、あの人なら、刃物に頼りたくなってしまう、あの感覚を理解してくれていた気がする。あの人はそれを承知の上で、それでも俺に刃物を握らせてくれた気がする。

きつとあの人もこの感覚に苦しんだ事があるんだ。彼女はどうかしてこれを克服したのだろうか？

聞いて見たい気持ちはある。御子に頼めば何とかしてもらえないのかもしれない。

けれども何故かそれが出来ない。何故なのかはハルオ自身にも分からなかった。おそらくは土間のハルオに対する戸惑いの気持ちは、ハルオの心に反映されてしまったのだろうか、ハルオにはそれが解らなかった。

「ね、ホントに軽い気持ちで相談に乗ってやってあげられない？」
礼似は土間に話しかけていた。

御子はああいったものの、やっぱりハルオの悩みを理解できるのは土間だろうと思った礼似は、とにかく土間を口説き落としてみる事にした。何も親子だってバラさなくたって、普通に刃物使いのプロの先輩として相談には乗れるだろうと思ったのだ。ただし、そこまで土間の心の整理をつけさせなくてはならないが。

「私があの子にかかわったら、あの子の出生がどこでどう漏れ出すか分からないじゃない。華風組が安定して、次の組長のアテが立つまでは、うかつにあの子には近づけないの」

案の定、土間は組の事情を言い訳にして来た。それも勿論そうだろうが、本音は土間のハルオへの愛情がハルオの心に伝わっていくことを恐れている。さらにそれを拒絶される日が来る事に脅えているのだろう。

これを御子の言うところの「ナイーブ」で片づけてしまうのは、何か納得できないものがある。土間もハルオも何か踏みださなければいけないんじゃないかしら？

「ね、土間。ちょっとここは逃げないで。あんたがハルオに接しにくいのは分かるけど、普通の親だったらここで逃げない。ううん、逃げようがないまま子供に何かを伝えようとするんじゃないかしら？ どんなに時間が経っても、たとえ拒絶されても、あきらめたりはしないんじゃない？ 甘いかもしれないけれど、私がハルオなら親にはそうしてもらいたい」

「ハルオは私が親だとは知らないわよ。あの子ももう、子供じゃないし」

逃げている。そう、指摘されて土間は内心ぎくりとする。自分は

若い時に親から逃げ回った挙句、両親に死なれてしまっている。それを後悔しながらも、今またハルオから逃げ回っている。

「別に親としてでなくてもいいわよ。今、ハルオには身近な理解者が必要なだけ。ハルオに刃物を持たせた指導者として、ハルオがここを乗り越える手伝いをしてほしいの。子供じゃなくなったからこそ、一人で何でも乗り越えられる幻想は抱けないわ。ハルオの悩みを理解できる人間に協力して欲しいのよ」

そう、私にはハルオが悩む、あの感覚が理解できる。克服する方法も知っている。そのためには、私はどれほどハルオの心を傷つけないといけないだろうか？ 脅し、挑発、ハルオの劣等感をとことんあぶり出し、それでもハルオが恐怖を克服できるまでに。

礼似に悪気はない。あの感覚を克服するには、どれほどハルオを傷つける必要があるのかを彼女は知らない。

私は知っているだけに、ハルオへの愛情からそれをするのにためらいがある。

「理解できるからこそ、できないこともあるのよ。私はハルオが自力で乗り越えられる事を信じて待つわ」

土間は話を打ち切ろうとしたが、礼似はむっとした顔で言い返してきた。

「親が子供に嫌われるのを怖がってどうすんの？ 信じて待つだけじゃ、人なんて育たないんじゃない？」

何よ、偉そうに。子供を持った事もない癖に。のど元まで言葉が出かかる。

と、同時に痛い所を突かれたとも思う。ハルオを傷つけないのは、ハルオに嫌われたくないという事だ。

信じるだけでは人は育たない。信じる気持ちは大事だが、人は人の手によってしか育たないのだろう。

どっち道、このままではハルオはあの感覚にもがき続けなければならぬ。どこかでケリを付ける必要がある。でも、よりにもよっ

て私がそれをしなければならいなんて。

「分かったわよ。私がハルオを仕込むわ。でも、それは相談で済むレベルの事じゃないの。私、ハルオを潰すかもしれないわよ」

あるいは私がハルオに斬られるかも知れないが、ハルオにだって本望だ。

「土間が一番いい方法だと思ってるでしょ？ 私は土間を信じるわよ」礼似は笑っていた。

もう！ こんなことには都合がいいんだから。

「今回だけはその笑顔にごまかされてあげる。次は無いからね」
そういう土間も、礼似に笑顔を見せていた。

礼似までもがハルオの事にかわり始めてしまったので、香はしばらく部屋には眠りに帰るだけで、用が無くても出かけてばかりの日々が続いていった。

このところ、事件や騒動が続いたおかげで、ゆっくり買い物もできなかつたので、のんびりとウインドウショッピングを楽しんだりする。娯楽やレジャーはともかく、香は服や小物、趣味の品に関しては一人で見て歩く方が好きだった。実際に買う時は誰と一緒にでも遠慮なんかしないのだが、欲しい物の目星をつける時は一人でゆっくり品定めをしたいのだ。どうせ自分の周りの人たちは、今、ハルオに意識がいつている。それなら今は一人の時間をゆっくり楽しむ。香は少しばかりすねたような、でも、ハルオにかわりたくないような、複雑な気分を晴らすべく、次々と店を回って歩いていた。あちこちの店を冷やかしながら、気に入った小物を二、三買い求め、そろそろ何か食べようかと考え始めた頃、ふと、いやな視線を感じた。自分が尾行する側に回った経験が感覚を鋭敏にしているらしい。はつきりとした気配がある訳ではないのだが、なにか、遠い位置から自分の姿を追いかけているような気がしてならない。

あまり見通しのいい場所にはいない方がいいな。

香はさりげない風を装いながら、大きなショッピングセンターのフードコートの人ごみにまぎれていった。

中にある喫茶店に入るようなふりをして、そのすぐ横に伸びている通路から外に出る。巻いただろうか？

あの視線はもう感じない。ホッとして小さな路地へ向かう。ここを抜ければ軽い軽食が食べられる店があったはずだ。数歩歩いたところで香は立ち止った。さっきとは違う気配。昔父親に感じた気配

だ。全身に鳥肌が立った。

目の前に一人の男が立っていた。しまった。追い込まれたのだろうか？ 前にいたのはあの、関口だった。

香は蛇に睨まれた蛙のように、そこから動けなくなってしまっていた。

「あら？」由美は人ごみの中でどこかで見たとような顔をみかけた。つい最近に会ったような気がする。

そうそう、確かハルオさんと一緒にいたお穰さん。香さんって言ったっけ。

こてつも覚えていたらしく、視線をそっちの方に向けてじっとしていた。

「お買い物かしらね？」何となくこてつに話しかける。

するとこてつが急に脅えたように後ずさった。香が歩いて行く方角を見ながら身体が後ずさっている。

「どうしたの？ こてつ」そういうか言わないかのうちに、由美もひどく嫌な予感に襲われた。

何かしら、ひどい胸騒ぎがする。あの方角から冷たい空気でも流れているような。

香はためらうことなくその方向へと歩いて行く。ついには路地に入ってしまった。

どうしよう。何だかあそこには悪い何かがある気がする。何がと言うと分からないけれど、香さんによくない事が起こるのは確かだわ。由美は自分の勘を信じた。

そうだ、ハルオさんがちょっとした知り合いだと言っていたっけ。真柴さんの所に連絡すればいいかもしれない。

由美は携帯を開いて真柴家のダイヤルを押した。

「はい、真柴です」御子がいつものように電話に出た。

「あら、そのお声は御子さんね。こんにちわ」電話口からのんびりと聞こえるのは由美の声だった。

「あ、こんにちは。父に御用でしょうか？ かわりましようか？」

「ああ、いいえ。真柴さんに用があるんじゃないかと。あら？ 誰に用だったんだつけ？ そうそう、ハルオさんはいらっしゃるかしら？」

「は？ ハルオ、ですか？」御子は首をかしげた。奥様がハルオに何の用だろう？

「あいにくハルオは今出かけていますが」

どうやら礼似に口説き落とされた土間が、ハルオを華風組の稽古場に呼び出して稽古をつけているらしい。ハルオの様子からかなり厳しい稽古のようだ。それももう三日目になっていた。

「いらっしゃらないんですか。どうしましょう。困ったわ」

「急用ならハルオに伝えますけど。携帯を今切っているとと思うので、少し時間はかかりますが」

「あの、急用と言っていいか分からないんですけど」

この予感をどう伝えたらいいのだろうか？ 戸惑いながらも由美は御子に説明を試みた。一通りの話を聞いた御子はあせる。

「あの、今どちらにいらっしゃるんですか？ まさかその路地に向かっているんじゃない？」

そんなことされたら大変だ。何があつたかは解らないが、香の様子がおかしかつたのなら、由美にとって決して安全な環境ではない。お願いだから、下手に動かないで！

「それが、気にはなるんですけどこてつがすっかり脅えてしまって、近づけないの。香さん大丈夫かしら？」

よし！ こてつ！ えらい！ 良くやった！ 御子は心の中で全

力でこてつを褒める。

「大丈夫ですよ。あの子は用心深い子ですから。私もよく知っていますし、ハルオにも知らせておきます。それよりも何か御用事があるて外出しているんじゃないですか？」

「まあ、そうだったわ。お買い物があったんだわ。ありがとう。忘れるところだった。ではハルオさんに伝えて下さいね」

「大丈夫ですよ。御心配なく。それより今日はこてつ君をいっぱい褒めてあげてください。じゃあ失礼します」

「はあ」由美は訳が解らぬまま電話を切った。

「こてつ。おまえ、とつてもいいことをしたみたいね？」

まあ、こてつが褒められているのなら、いいか。お買い物、済ませて帰ろう。

褒められたらしいと察して、胸を張ってご機嫌なこてつを連れて、由美は街の中を歩いて行った。

「どうやら香は何かに巻き込まれているらしい。携帯に電話をしてみたが、やはり出る様子はない。御子はそのまま礼似に連絡を取った。」

「香が？」すぐに出了た礼似は驚いた声をあげる。

「ねえ、何か香が巻き込まれそうな事、最近起きてなかった？」御子は切迫した声で聞いた。

「最近なんて平和なものよ。その前なら、ハルオと大谷に捕まった件と、倉田さんの事で関口に襲われた件しかないし。どっちも香自身が狙われた訳じゃないわ。大谷はすぐに二人を解放したしね」

「まって、どっちの件も関口が絡んでるわ。あの娘、自分で気付かない内に関口の恨みでも買ったんじゃないかしら？　まずいわ。相手は殺しのプロなのに」

「恨みって、どんな？　それにプロの関口が個人の恨みで香をどうこうするとは思えない。あの娘に関口にとってうまみにつながる何があるっていいのかしら？」

「誰かに雇われて香を狙ったとか」言いながら御子もそれはあり得ないと思う。香がプロを雇ってまで殺される必要がある娘だとは思えない。父親が殺し屋だったそうだが、もうずいぶん昔に死んでいる。今更その娘が狙われるのは不自然だ。

「考えられないわ。あと、香が絡んだのは倉田さんと、ハルオ。倉田さんが今更襲われるとは思えないし、ハルオなんて誰が」礼似はそこまで言う以前、香に聞いた言葉を思い出した。

「関口が言っていたのは、刀使いが増えるのは見過ごせない」

「ハルオが狙いなんじゃないかしら？」礼似が呆然としながら言った。

「え？ ハルオ？」御子は思わず聞き返す。

「関口は刀使いが増えるのを嫌ってた。土間が刀を握るのを倉田さんをどうにかしてまでも止めようとしたくらいにね。ハルオにも刃物を握らせたくはないんじゃない？」

「だって、ハルオが関口の前でナイフを握ったのは偶発的だったはずよ。それほど気に掛けるとは思えないわ」

礼似是考えをめぐらせた。

「もしも、もしも、ハルオが土間の子供だって知られていたら？」

ハルオの出生がバレていたら？ 土間にもハルオにも刃物を持たせたくない関口には、ハルオ潰しは都合がいいんじゃない？」

「そうか。だからハルオが気がある香をどうにかしてハルオと、ひよっとしたら土間もまとめて潰そうって考えたのかも」御子も納得した。そう考えればつじつまは合う。

だとしたら大変だ。現在の華風組の弱点が知られてしまっている事になる。

「これ、絶対に土間とハルオに知られる訳にはいかないわ。早く香を助けないと」

「もう向かってる。今、バイクに乗る所。あんたも早く良平を連れて来て頂戴。他の連中にはバレないようにね」

騒ぎが大きくなったら、話が広がってしまうだろう。まったくなんてこと！

土間やハルオに知られたら、二人とも冷静ではいられないだろう。そもそもハルオに自分の出生がバレてしまふ。

ここは何としても三人だけで香を助けなければならない。

これは何かの交換条件がある訳じゃない。要は土間とハルオがシヨックで潰れるのを狙っているのだろう。関口は香の生死を問う必要は無いはずだ。

香、無事でいてよ。

御子は良平とともに、祈るような気持で車に乗り込んだ。

ハル才は連日の土間との稽古に耐え続けていた。やはり土間は、自分があの独特の感覚から逃れられずにいる事を知っていた。今はそれを克服するべく訓練を受けている。

連日の真剣勝負となった。土間に容赦は無かった。ハル才は少なからず小さな刀傷を連日受けていた。

ハル才はそれまで、刀や刃物でどんな小さな傷も受けた事が無かった。それほどまでに自分の逃げっぷりに自信を持っていた。しかし今度は立ち向かわなくては意味がない。しかも土間は、わずかなハル才のためらいも許さなかった。土間に切りかかる一瞬でもためらおうものなら、容赦のない刃がハル才の身を傷つけた。

それまで脅えていた刃物への恐怖心などいっぺんに吹き飛んだ。そんな事を考えていたら本当に殺されてしまう。

本物の命の危機の前では、どんな悩みも考えるだけ無駄だった。勿論刃物に頼る、あの感覚も襲っては来るが、頼っているという罪悪感が、実はただの甘えでしかなかった事をまざまざと思い知らされる。人に命を奪われるとはどういうことなのか、身をもって知ってしまう。

しかも土間は、言葉や態度でもハル才を攻撃してきた。仲間から身内の様に守られる甘さ、同情される情けなさ、そこに逃げ込む弱さ、心の奥のねたみ、気概のなさ。気にしながらも慰められ続けて、何とかこらえてきた部分が遠慮なしにえぐられる。

なんで俺はこの人に、憎くもないのに切りかからなきゃならないんだ？ しかも、向かえば向かうほどに好き放題に言われるじゃないか。俺は何をしているんだろう？ こんなにも強い人に向かつて、そうだ。この人は強い。さほど変わらない体つきに見えるのに、男の自分より、ずっと大きく見えてくる。この威圧感、圧倒する強さ。これさえあれば、余計な喧嘩は買わずに済む。

俺もこんな風になりたい。この人に、こんな事を言われぬ……いや、言わせぬようになりたい。

しかし、ハルオの思いが一層強くなるのは、実は稽古終わりの時だった。

土間が刀をしまい、ハルオもドスを鞘に納めると、土間はハルオを見る目が一瞬変わるのだ。

苦しんでいるような、悲しんでいるような、何かを抑えつけているような目をする。その時ハルオは強く思う。

この人は、こんな目をしてまで自分の稽古に全力で向かってきている。自分だって本気で向かっている。お互いに命懸けだ。ここまでやってくれる人なんてそうはいないはず。

この人のようにになりたい。いや、この人を越えてみたい。

良平への憧れとははつきりと違う、もっとも強い思い。あんな風になってみたいのではない。あの向こうへ飛び立って行きたいという思い。この人に苦しげな目をさせないようにになりたいという思い。

今までは誰かを守りたいとばかり思っていた。それは今でも変わらないが、こんなにもはつきりと誰かを超えたいと思ったことは一度もなかった。立ちほだかれるほどに、大きく思えるほどに、超えたいと思わずにはいられない。

土間さんを越えたい。

ハルオが、厳しい稽古に耐える心を支えているのは、まさにこの思いからだった。

土間さんは、これ乗り越えてここまで強くなったんだ。自分もその上を目指したい。身を守るだけじゃない。この心を手に入れたい。誰かのために、ここまでする事が出来る心を。

「また会ったな、お嬢ちゃん」関口は冷ややかな笑顔を香に向けた。それだけで香は背中に冷たい汗が走った。この間ハルオと自分をつけて来た関口とは様子がはつきりと違う。

その表情を見るだけで、血なまぐさい匂いを感じてしまう。プロの殺し屋としての殺気が漂っていた。

逃げなければ。頭ではそう思っているのに身体が全く動かなかった。

「あなたに恨みは無いんだがね。ちょっとばかり、こっちの都合に付き合ってもらおう事にしたんだ。運が悪いと思ってあきらめてくれ」そういつてゆっくりと刀を抜く。ようやく香は足が動いて、後ろに後ずさった。

もどかしいほどに足の動きが悪い。香はのろのろと後ずさる。その時ショルダーバッグの中の携帯が鳴った。

無意識にバッグの中に手を伸ばそうとしていきなり切りつけられる。香は思わずバッグを盾にする。

携帯はまだなっているが、バッグを開いて取り出す余裕はない。

ついには腕に浅く切りつけられて一筋の血が流れる。その時関口の目が変わった。尋常な目じゃない。

いたぶるように刀が襲ってくる。バッグだけでは身を守りきれない。あちこちに小さな傷を負う。逃げなければ！

やっとの思いで後ろに駆け出す。が、そこに別の男が立ちふさがり。おそらくこいつがつけていた男だろう。

「すいません。一度、まかれました。ちよろちよろした娘みたいですね」男は忌々しそうに香を見た。

「何。今じつとさせてやるぞ」

関口がそういうと、バッグの隙間から刃が飛んできた。香は思わず悲鳴を上げる。

先に着いたのは礼似の方だった。バイクから飛び降りて路地に向かう。異様な空気が辺りを包んでいる。

目に飛び込んできたのは、二人の男に捕まえられ、もがいている香の姿だった。香は開いたバッグを取り落とし、刀を持った男、関口に押さえつけられる。

「香！」礼似が思わず叫ぶと、香が振りかえり顔をあげた。礼似は息を飲んだ。

香の頬は刀で斬りつけられ、大量の血が流れている。全身のあちこちにも小さな傷を負っているようだ。

香は気の強い娘だが、さすがに今は恐怖におびえた目をしていて、それでもかなりの抵抗を見せたのか、もう一人の男の顔には引っかけ傷が残っていた。

「あんたが関口。女の顔になんてことするのよ」怒りのあまり声が震える。

それを聞いた関口の刀が動いた。香の喉元に刃先をぴたりと当てる。

礼似の動きが止まる。御子と良平も到着したが、その姿を見て動きが止まった。

「顔ぐらいで騒ぐな。掻っ切るのはこいつの喉でも俺は構わないんだ」関口はうすく笑う。

「香をどうする気？」礼似が関口を睨みつけたまま聞いた。

「さあ、どうするか。殺しはしないが。気のある女が生きたまま苦しむ姿の方がハルオには効果的だろう。土間も二度と刀は握れまい。女に死なれて弱くなるような奴だ。息子の生き地獄には耐えられないだろう」

やはり狙いはそこだったか。礼似も御子も必死に関口の隙を探る。しかし相手はプロ。香を人質にされると、隙らしい隙は見当たらない。殺さないというのは口だけで、自分達が動けば容赦のないことを御子も読みとっていた。

「土間は弱くなんかないわよ。あんたよりはずっとね」礼似が言う。
「どつちでもいいさ。この娘の事はハルオが姿を見せてから考える。
とりあえず娘は連れていくが、ハルオに一人で迎えに来させる。場
所はハルオの携帯に知らせてやる。お前らがついてきたら娘の命の
保証はない」

そういつて関口は、もう一人の男が用意した車に香を引きずって
いく。喉には刀が当てられたままだ。

三人が一歩も動けないまま、香は車に押し込められ、連れ去られ
てしまった。

「香……」礼似は地面に落ちている香のバッグと、散らばった中身を見降ろした。相当切りつけられたのだろう。バッグは刀傷でボロボロになっていた。

悔しさに歯がみしながらバッグの中身を拾っていると、不意に、マイク越しの香の声が聞こえた。

「どこに連れていく気？」

「黙っている。本当に喉を搔つ切りたいのか？」関口の声も聞こえる。慌てて荷物を確認すると、ハンカチに何かが包まれている。

盗聴器だ。香の声の方がはつきり聞こえる。バッグを取り落とし、たあの一瞬で、自らの身にワイヤレスマイクをしかけたに違いない。

「御子！ 良平！ これ」礼似は二人に盗聴器を見せた。

「香……。よくやったわ。あんな状況で」御子が思わずつぶやいた。香は言われたとおりにおとなしくしているらしい。車のエンジン音だけが響いて聞こえる。

「これで場所が分かるかもしれない。もし、関口が香から離れる時があれば助けだすチャンスだわ」礼似にも希望が見えて来た。

「土間とハルオに知らせがいかない内に、助けられればいいが」良平が気をもむ。

「うっん。こうなった以上、二人に事情を話さない訳にはいかないわ。でも、香は一刻も早く助けないと。あの口ぶりじゃ、香に何をするか解ったもんじゃないわ」御子も覚悟を決めたようだ。

「香は私が助け出すわ。必ず隙はあるはずよ。私ならバイクで小回りも利くし、動きやすい。二人は土間とハルオを落ち着かせてくれる？ 相当動揺するだろうから」そう、礼似は言ったが

「礼似だつて動揺してるでしょ。大丈夫、香は強い娘よ。あんたが来るのをきつと信じてるはずよ」と、御子は励ました。

「そうね。きつとあの娘は関口の間隙を知らせて来る。チャンスは逃

さない」礼似もうなずく。

すると、マイク越しの車の音の気配が変わった。どこかに止まったらしい。三人は耳をすませた。

「着いたぞ、降りろ」関口の声がする。

「どこなの？　ここは」香が尋ねる。

「たいして街から離れちゃいない。郊外の潰れたジムさ。去年までは営業していたが、今は俺の根城だ」

郊外の潰れたジム。聞いた事がある。大型チェーンのジムが街の郊外にあったが、今年になって撤退したと街のニュースになっていた。

「場所は分かったわ。私、行って来る。二人ともハルオと土間をお願いね」そういつて礼似は盗聴器を手にバイクに向かって行く。

「何かあったら知らせてよ！」御子は礼似の背中に声をかける。

礼似はヘルメットをかぶりながら振り返り、軽くうなずいた。

「俺達も急ごう」そういつて良平は御子を車へと向かわせていった。

香は関口に追い立てられるようにして、車から降りた。目の前の建物は、去年まで営業していただけあって、外観はそれほど大きく変化したようには見えなかったが、正面の扉には鎖がかけられ、鍵がかけられている。

何より大きな建物に人気がないと、それだけでもいやな雰囲気が出てくる。まして郊外で、周りを囲んだ駐車スペースに車が止まっていなければ、その一帯ががらんとした空虚な虚無感に包まれてしまう。

関口はその正面の入口には目もくれずに、香を裏の従業員が使っていたであろう入口へと引つ張っていった。

扉を開くと一気に生活感にあふれた部屋が目に見え込んだ。

おそらくは元は事務室だったのだろう。事務机が三つとそれぞれにイス。他にソファが置かれていて、毛布やまくらと言った、人の寝起きしている気配がありありと見て取れる。

机の上にも物を食べ散らかした跡が残り、関口は「根城」と呼んでいたが、香の印象は「ねぐら」と言っただ方が正しい気がした。もう一人の男が、事務用の物ではない、パイプイスをもつてくると、香を連れて行き「そこに座れ」と命令する。香はおとなしく従った。男は部屋を出ていき、香は関口と向き合っていた。

「ハルオさんを呼び出すつもり？」香は関口に聞いて見た。

「勿論そうだが、今じゃない。お前の仲間に来るなと言っただが、そう言われておとなしくしている連中じゃない事は俺だって分かっている。こっちだってあたま数をそろえる。まあ、それまではゆっくり待っているさ」

ゆっくり待つ。その言葉の意味はおそらく私が弱るのを待つという事なんだろう。だってあの時こいつは私が生きたまま苦しむ方が

ハルオには効果的だと言った。私が明らかに弱った時を狙って、ハルオにその姿を見せるつもりに違いない。これからはここでのんびりまっしてくる訳ではなさそうだ。

それならこつちも簡単にくじける訳にはいかない。弱った姿は見せられない。少なくとも気力がなえたところは見せられない。そうすれば一層弱らせるために、何をされるか分からない。

気を張っていたって、何してくるか分かったもんじゃないけど、本当に弱り切ってしまったら、助かるチャンスもなくなってしまう。とっさに襟元につけたワイヤレスマイク。生きてくれればいいんだけど。

マイクの音声は一方通行だ。この会話が向こうに届いているかどうかは自分には分からない。それでも今はこのマイク越しの会話が、礼似さん達に届いている事を祈るしかないだろう。

「あんたは流れ者だと思ってたけど、そろえるようなあたま数がないのね」香は会話を続けようとする。もし、マイクが生きていてくれれば、情報量は少しでも多い方がいいだろう。

「さつきつからおしゃべりな小娘だな。顔に傷を付けられたつてのに、大したタマだ」関口は香に顔の事を思い出させようとする。じっくりと顔色の変化を楽しんでいるようだ。

「私はね、他人さまから白い目で見られる事には慣れてるのよ。あんたみたいな男が父親だったもんでね。そんじょそこの小娘と一緒ににして、甘く見ないでほしいわね」

関口は意外そうな顔をした。ハルオの事は調べていても、自分の事までは調べた訳ではなさそうだ。これならかなりのハツタリも通用するかもしれない。

「ほう？お前は刀使いの娘ってわけか。どつりでやけに気が強い訳だ。だが、それなら俺のような男は人を斬り殺すのに、大したためらいもない事も知っているだろう？うかつな態度をとると、本当に命がなくなるぞ」

関口が凄んで見せる。あの、ぞっとするような笑顔を口元に浮かべながら。

「えーえ、知ってるわよ。刀の勢いにのまれて酔っ払ったみたいな顔で、人を斬るんでしょう？ じゃなきゃ、怖くて相手の顔さえ見れないのよね。冷めたらただの臆病者だから」香はわざと挑発する。少なくとも言葉や威嚇に負ける女だとは思わせたくない。逆上される可能性も大きい。ギリギリと弱らされるような真似をされるよりはこつちとしてもマシってものだ。

「小生意気な奴だ。だが、臆病かどうかは俺に斬られて分からなかったのか？ 俺はな、人に斬りつける時に興奮する性質なんだ。はっきりいって気持ちがいい。女の顔なんか最高さ」

本気で言っているのだろうか？ それとも自分への脅しか？ どっちにしてもここでおびえた顔を見せたくはない。

「二言目には顔、顔って。あんたって結構ナルシスト？ それとも美人に恨みでもあるのかしらね？ 今時女の命は顔じゃないの。ハートよ、ハート。心の愛きようで勝負するの」

「減らず口が多いな。今度はその口先を斬ってやろうか？」

「あんただって口先だけじゃない。結局私に死なれたら、計画もおじゃんだし、呼びつけたあたまた数の連中にも面子が立たないからでしょ？ 自分の思うとおり、事に事が運ばないと、すぐに潰れる臆病者よ」

香は関口を睨みつける。ここは意地を通してみせる。

「それにね、ハルオさんや土間さんはあんたとは違うわよ。二人とも刀に酔ったりなんかしない。道具に使われて振り回されるような間抜けじゃないわ。私は父親のそういう弱さを知ってるの。あんたはただの間抜けよ。二人に本気で向かってこられたら、あんたなんか相手にならないわ」香は関口から視線を外さない。じっと睨んで、

またたきさえ忘れていた。

関口はうんざりした表情を見せる。香がここまで言ってくるとは思わなかったに違いない。忌々しげな顔をする。

「全く口の減らない小娘だ。少し一人で黙っている。言っとくがドアには当然、外から力ギがかかっている。この部屋に窓は無いぞ。多少息苦しいぐらいが、おとなしくするにはちょうどいいだろう」

関口が部屋を出る瞬間を狙おうとしたが、その背中から強い殺気が感じられた。やはり関口の間隙を突くのは簡単なことではなさそうだ。やむなく、香はその場に座り続けていた。

どうしてこう、あの子は気が強すぎるんだろう？

バイクから降りて、香と関口の会話を途中からマイク越しに聞いていた礼似はギリギリと歯がみをしていた。

そりゃ、気力を保つためにも、相手になめられないためにも、気概は必要だけど……。あんなに言いたい放題言っつて、その場で殺されたらどうすんのよ！ もうちょっと、おだてるとか、しおらしさを見せるとかできない訳？

そう、思いながらも、どうにか香が無事らしいと分かって、とりあえずは安心する。しかし一刻の猶予もない状況に変わりはないだろう。元ジムの建物に着いた礼似は、とにかく香の姿の見えそうな所を探す。外見からはそれらしき姿は見られない。パツと見は営業中と変わらない建物も、中をのぞけばほこりをかぶり、よんだ空気が滞留しているのが伝わってくる。人の居なくなつた建物はそういうものなのだろう。

裏の方に回ってみる。やはり裏口があった。香はおそらくこの中の部屋にいるのだろう。

マイクからの会話のおかげで、香が今、部屋に一人でいる事が分かった。助け出すには今がチャンスだ。

幸い鍵は外鍵だ。関口達がいらないことを確かめながら、そつと、ドアに近付く。見張りはいないようだ。

まさか、自分達の会話が筒抜けだとは、関口達も思わずにいたに
違いない。香のマイクは、想像以上に役立つてくれたようだ。

扉を開くとすぐに香の姿が目に見え込んだ。ホッとした表情が、
香の顔にすぐ浮かんだ。顔色が悪い。

顔はやや深手のようだが、他は軽傷のようだ。それでもそれなり
の時間を治療もせずに放っておかれたせいか、香の体力は消耗して
いるようだった。

この状態で、よく、関口につつかつかつかっていたものだ。しかし、そ
のおかげで助け出すチャンスを作る事が出来た。たいした娘だ。

「大丈夫よ。よく、マイクをしかけたわね。おかげで場所と、あんな
たが一人になった事が解ったわ。辛いだろうけどもうひと踏ん張り
頑張りなさい。バイクで逃げるから」

そういつて香を連れて部屋を出ようとしたが、外に出たとたん、
数人の男達に出くわしてしまった。これがあたま数の連中か。二人
は急いでバイクのある場所へ向かったが、バイクの前には関口が立
っていた。

「随分早く、お客さんが着いたようだな。どんなもてなしをしてや
ろうか？」関口はバイクのキーを片手にそういった。

御子は華風組に着くと、土間とハルオを問答無用で連れ出した。強引に車の中に二人を放りこむ。

「ちよつと！ いったいどうしたっていうのよ？」土間が訳が解らぬままに問いただす。御子は真剣な顔で土間に説明した。

「あのね。香が関口にさらわれたの。あんたとハルオを動揺させるために」

「か、香さんが？」真つ先にハルオが反応した。

「今、礼似が助けに行ってる。何故香が狙われたのか、ハルオに説明が必要なの。土間、これは香の命がかかっている。ハルオに話してもいいわね？」

言葉は質問になっているが、御子の目は決意を促しているものだった。とても嫌だとは言えない。いつかは知られる事だったのだ。土間はそつとうなずいた。御子はハルオに向き直る。

「ハルオ、突然で驚くでしょうけど、落ち着いて聞いてね。あなたの父親は一流の刀使いだったの。しかも母親もこの世界の人だった。あなたには一流の刀使いになれる素質が受け継がれているの。関口はそれを嫌がっているのよ。だから、あなたの弱点の香をさらって、あなたに刃物を持たせないようにしようとしているの」

御子はここまでを一気に言った。突然の親の話にハルオはただ、驚いている。

「しかもあなたにはもう一つ事情があるの。あなたの存在は、華風組の命運を握っているかもしれないのよ」

「華風組？」これにはハルオの頭もついていかないらしい。

「あなたの母親は、華風組の血筋を受け継いでいる人だった。ハルオ、あなたにもその血が受け継がれているの。華風組はつい最近まで、血を分けた者が後を継いできた組だった。あなたが華風組を継ぐような事になっても、おかしくない仕組みでやってきた組なのよ。」

そのあんたが潰れてくれる事を願う奴等が出て来たって不思議は無いの。関口はそこに目をつけたのよ」

「そ、それなら、お、俺が、は、刃物を、も、持つのを、や、やめれば、す、すむ事じゃ、な、ないか」

「ところがそうはいかないのよ。あんたの中にはそういう血が受け継がれているんだから。それを知られてしまっている以上、あんたがとことん潰れるまでは、あんたは狙われ続けるわ。それに、これはあんただけの問題じゃないの」

御子は土間の方をちらりと見た。土間は車の外に顔を向けて表情を見せないようにしていた。御子は意を決して言った。

「ハルオ、あんたの父親は、この、華風組長、土間富士子……いいえ。聡次郎なの」

ハルオは口を半開きにしたまま絶句していた。土間はピクリとも動かない。御子はハルオが言葉の意味を呑み込めるように、少しの間を置いていた。すぐに理解できるとも思えないが。

「土間はね、今は事情があつてこの姿になつたけど、もともとは、あんたの父親だった……いいえ、今だつて父親よ。認めにくいとは思うけど」

説明している御子自身にも実感が無い。御子が知っている土間は、すでに女性となつてしまつていた土間だけだ。

元男性だったことは初めから伝えられてはいたが、それを意識した事など一度もなかったし、土間も自分が男性であると、今は思つてはいないのだろう。そのメンタリティは、すでに女性の物だと思つている。

しかし、今は実感のあるなしを考えている場合じゃない。香の生死がかかっているのだから。

「土間があんたの親である以上、親子の情は逃れられないわ。香に何かがあれば、あんたは傷つく。そんなあんたの姿を見れば、土間

も平静ではいられなくなるの。男であろうと女であろうと、あんたは土間の血を分けた子供であることには、変わりないんだから。あんたは土間にとって、最大の弱点なの」

「俺が、弱点。土間さんの」ハル才はゆっくりとつぶやく。心の何かを確認するように。

「そう、しかもそれは華風組の弱点にもつながる。だから関口はあんたを潰すためなら、香に何をするか分からない。今、香は本当に危ない状態なの。現に連れ去られる時には顔に深手を負わされていたわ。あれもハル才を苦しめるためでしょうね」

ハル才も土間も顔色が変わる。そんな目に香を合わせてしまったにもかかわらず、香はまだ、関口達の手の中にいるのだ。

「ハル才、私はあんたの冷静さに賭けるわ。香を無事に助け出すまでは、何があっても動揺を表に出さないで。あんたが顔色を変えれば、それだけでも関口達の思うツボなんだから」

「そ、そんな事、い、言われたって」ハル才は顔を真っ赤にしていた。最初のショックから、今度は怒りがわいてきたのだろう。

「いい？ 香は強い娘よ。きっと私達の事を信じてる。どんな目にあわされようともね。その気持ちを裏切れないでしょ？ あんたもその、香の強さを信じてあげて。確実に香を助け出すのよ。分かった？ 土間、あんたも同じだからね」

「なるべく顔には出さないけど」その土間の怒りも、すでに頂点だ。おそらくはらわたは煮えくりかえっている。

「おい、感情に振り回されている場合じゃないぞ。礼似さんと香が、まずい事になりそうだ」

違法なのは百も承知だが、良平は携帯を耳にしたまま運転していた。携帯からは、雑音混じりに香のマイクの声が聞こえている。どうやら礼似が状況を伝えるために、盗聴器を自分の携帯に押し付けているらしい。

「どうやら礼似さんも見つかったようだ。このままじゃ二人とも危ない。急ぐぞ」

そういうと良平は御子に携帯を放ってよこし、自分は車のスピードを上げた。今度は御子が良平の携帯に耳をすませる。

「悪いけどおもてなしを受けている暇はないの。なにしろけが人がいるからね」礼似の皮肉を込めたセリフが聞こえる。

おそらくわざとそういうセリフを言っているのだろう。香の傷は浅くなかった。消耗しているのかもしれない。

「その穢ちゃんはなかなかおとなしくなってくれなかったんでね。もてなすほうも苦労したんだ。あんたはおとなしくエスコートされて欲しいもんだ」少し雑音混じりに関口の声も聞こえてくる。その周りで少しざわめいた様な気配。

おそらく他にも数人の人間がいるのだろう。礼似だけでは香を守りきれそうにない。何より関口は腕の立つプロだ。

「結構人数がいそうね。ハルオ。あっちに着いたら、まず、あんたが関口達の気を引いて。土間は関口をお願い。あいつはあんたにか任せられないわ。私達は雑魚を何とかして香を助けるから」御子が指示を出す。

そうだ。動揺して怒りにかまけている場合じゃない。まずは香の無事が優先だ。土間とハルオは互いの目を見かわして頷いた。

「エスコートして下さるんなら、紳士的にふるまってね。とくに若い子には」関口達の取り囲まれながら礼似と香は再び裏口から建物の中に入っていく。今度はさっきの部屋を通り抜けて、廊下を通り、広い、ダンススタジオのような空間に出る。床に座る瞬間、香がふらついたように見えた。動き回って、腕の傷が開いたらしく、腕から出血をしている。今、無理はできない。どっち道、バイクのキーは関口に奪われている。

「さて、せっかく女性が二人もいるんだ。ここは舞踏会としゃれこもうじゃないか。裸踊りなら大歓迎だが」関口が言う。

「脱がせ上手はクライじゃないけどね。もうちよつとマシな場所でお誘いが欲しかったわ」そういいながらポケットのナイフを探る。上着の別のポケットには銃があるが、今、関口を脅した所で、香を人質にされれば万事休すだ。

多勢に無勢。余計な刺激はなるべく避けた方がいい。御子達が早く来てくれれば。

「お、俺は歓迎できないぞ！ ふ、二人とも、か、返してもらおう！」
がらんとしたスタジオに、ハルオの声が響いた。後ろには土間と御子、良平もいる。

「次々とゲストの到着か。いやに早すぎる。招待状はまだ出していないんだが」関口の刀の切っ先がひらりと動いた。香の顔をかすめる。

「きゃ！」香の小さな悲鳴とともに、襟元が切り裂かれ、膝の上に小さなワイヤレスマイクが転がり落ちた。

早かった。礼似では反応できない。どうやって関口から香を引き放そう？

「成程な。俺の目をダシ抜けるとは大したお嬢さんだな。確かに甘く見ていたようだ」関口が香を見下ろしながら感心して見せた。

香は膝に落ちたマイクを何気なく拾い上げた。ほんの一瞬、香の指先が動く。関口ははっとしたように香から離れると、目を刀で

かばうしぐさをした。「キン！」と言う金属音とともに、マイクが床に転げ落ちる。

「こいつ！」関口がカツとなって香に向かおうとしたが、その目の前に突然ハルオが現れた。刀をドスで受け止めている。早い！こいつ腕をあげやがった。

「か、香さんに、て、手出しは、さ、させない」

このどもり言葉に騙される。こいつの事も、やや甘く見てしまっていたか。こんなに短い時間で、これほど感覚が研ぎ澄まされるとは思っていなかった。しかし、

「まだ、若い！」関口は刀でハルオを刺しにくしぐさをする。ハルオは横に飛んだが、その身体を追いかけようにして、刀が真横に迫ってきた。ハルオは刀をドスで受け止めたが、空中にあっては体制は立て直せない。そのまま体が投げ出される。次の刃が来る。

間に合うか？ハルオがドスを構えようとした瞬間に、別の刀が目の前に現れた。鋭い金属音が響く。

「あんたの相手は、私にさせてもらっわ。ハルオよりは手ごたえがあると思うんだけど」

そういつて、土間が関口に立ちはだかった。この隙に礼似は香を関口から遠く引き離し、襲ってくる雑魚をナイフで払いのける。御子と良平も加勢に加わった。

「ハルオ、こいつは私に任せて、香を車に連れていきなさい」土間がハルオに指示を出す。

「いやだ！ こいつだけは俺が相手になる！」ハルオは顔を高揚させてむきになった。しかし土間は取り合わない。

「ハルオは何が一番大事なの？ なんのためにあなたに私のドスを持たせたと思ってるの？ あなたの大事な人たちを守るためでしょう？ こんな屑に仕返しするために使うってんなら、そのドス、とつと返してもらおうよ」

ハルオは関口を睨みつけると、香の顔を見た。傷口に血がこびりついている。腕からはうっすらと血がにじんでいた。

「私なら大丈夫よ。両足は何ともないんだから。自分で歩けるわ。あんたが納得できる行動をしてよ」

香はそういったが、刀傷特有の痛みがない訳がない。青い顔が痛々しい。気力だけでも相当堪えているはずだ。

ハルオは香を自分の背中に背負った。抱えあげるにはハルオの体格はいささかきついものがあつた。かつこをつけている場合ではない。襲ってくる奴には礼似が援護をした。

「あんたが、息子の代わりって訳か」関口が土間に向き直る。

「相手として不足は無いでしょう？」土間もかまえる。

「まあな。女子供に気が弱くなる奴なのは気に入らないが、腕は認めてやるよ。だが」

関口はそのまま斬りかかった。

「腕だけじゃ、殺し合いは出来ねえぜ！」

土間は、その刃をひらりとかわすと、次の刃もあっさりと跳ね返した。体制が崩れた関口に柄元をたたきつける。

倒れた関口に刃をちらつかせていった。

「殺し合いをする気なんて、サラサラないわ」

関口の胸ぐらをつかみ上げる。

「勘違いも甚だしいわ。私は弱くなって男を捨てたんじゃない」
関口の頬を殴りつける。

「より、強く生きるために、女を選んだのよ」

関口は横倒しに倒れていく。

「たとえ、自分の子に、どんな目で見られようともね」

土間は関口を見降ろした。

「ハル才はあんたより強いわ。あの子は刃物に吞まれたりしない。
殺し合いなんて必要ないの」

あの子はあの子のままに強くなれるわ。私と違って。

土間は最後には自分の心に言い聞かせながら、香を背負ってスタ
ジオを出ていくハル才の姿を見送っていた。

香を病院に連れていくと、ハル才は外に出ると言って、その場を離れた。御子が後を追うようにと促す。

「私と顔を合わせにくくて、離れたんでしよう。私だって顔のあわせようがないわ」土間はためらった。

「香の事でシヨツクを受けているはずよ。そばにいてあげればいいじゃない。何にも話さなくてもいいから」

そう言われると、やはりじっとしてもいられない。土間はハル才のあとを追った。

ハル才は土間の姿に気が付くと、以外にも、自分から土間に話しかけて来た。

「あ、あなたが、お、俺を手放したのは、こ、こういう事があるからなんですネ？」真っ直ぐに土間を見る。

「お、俺が絡まなきゃ、か、香さんはこんな目には、あ、あわなかった。あ、あなたの時は、お、俺がそういう目に、あ、あう可能性があった。そ、そうですね？」

「……ええ」

「お、俺の母親は、ど、どうなっただんですか？」

土間は辛い目の色をして、遠い思い出をたどる。

「私への逆恨みから、刺殺されたわ。華風組の血筋としてではなく、全くの逆恨み。憎い男の女って事だけで殺されてしまったの。私が死なせたも同然よ」

二人はそのまま黙りこんだ。ハル才は自分に課せられている運命を理解するために。土間はハル才に与えてしまった運命に懺悔するために。

「ま、前にあなたは言いましたね。は、刃物を握ったからと言って、大事な人を守りきれるとは、か、限らないって。お、俺は香さ

んを守りきれませんでした。こ、これからも大事な人を、き、傷つけるかもしれない。お、俺達が俺の母親を、う、失ったみたいに」「そうね。いつか、また、私達はつけ狙われるかもしれない」

また、訪れる沈黙の時間。

「お、俺は、強くならなきゃいけない。俺を守ってくれた人たちのために」ハル才は自分に言い聞かせるように言った。

「か、香さんは、お、俺のせいであんな目にあつたのに、あそこまでこらえてくれた。お、俺の納得できる行動を取れと言ってくれた。お、俺は強くならなきゃいけないんだ」

そして視線を土間に向ける。強い目の色が宿る。

「お、俺、あなたを追い越したい。あ、あなたは俺をあの時守ってくれた。俺に刃物を持つ勇氣もくれた。命懸けで俺の恐怖心をぬぐい取ってくれようとしている。俺、あなたを追い越したいんです」ハル才はきっぱりと言った。

やはりこの子は強い。私とは違う。愛する人を傷つけられても、その人がハル才を信じている限り、決してゆれたりはしない。信じてもらえる自分をハル才自身が信じている。

「追い越せるわ。あんたはきつと私を追い越せる。腕だけではなく、いろんな事を追い越していけるわ」土間はほほ笑んだ。

「あ、あなたに、そういつてもらえて、こ、光栄です。あ、あなたは俺の、も、目標ですから。お、親だか、し、師匠だか、ほ、他の組の、く、組長だか、どれだっていいんです。あ、あなたは、ただ、目標なんです」

目標。目指すべきもの。超えるべきもの。

ハル才、私の方こそ光栄よ。あんたにそんな風にいつてもらえて「ありがとう。でも、簡単には追い抜かせないわよ。これでも組をしょって立つ身なんだから。私の稽古はまだ必要かしら？」

「い、いえ。結構です。お、俺は俺なりに克服してみます。りよ、良平や御子と、腕を磨きます。い、今まで、ありがとうございまして」そういつてハル才は頭を下げた。

「お礼はまだ早いわ。これからもあんたを見守るから。ハルオが私を追い抜くまではね」

これで、やっと一つ。私はハルオに、親らしい事を、師匠らしい事を、してやる事が出来たのだろうか……？

香が治療を終える頃、バタバタと処置室の前に駆け込んできた人物がいた。倉田だ。良平は立ち上がって倉田に詫びた。

「倉田さん。申し訳ない。香に気が回らずに、怪我をさせてしまった。俺達の失態です」

「いや、あんた達のせいじゃないのは分かってる。出来ればあの子には足を洗ってほしかったが、それをさせられなかったのは俺だ。とても強制はできなかった。俺たちみたいな後ろ暗い人間には、どうする事も出来ないさ」

倉田は深く息を突いた。走ってきたせいばかりではないだろう。すると香が処置室から出て来た。治療は終わったようだ。頬のガ―ゼや、腕の包帯が痛々しい。倉田は悲しげな顔で香を見ていた。

「香。お前さん、とうとうこんな目にまであっちゃまって」
そういう倉田に、香は笑顔を見せて言い返した。

「倉田さん。もっと私を褒めてくれない？ 私、負けなかったわよ。あいつらの持つ見栄にも、欲にも、脅しにも。人を傷つける道具にもね。みんなに助けてもらうまで、とうとう折れなかったんだから」
そう言つて胸を張った。

「この傷は私の勲章よ。私みたいな折れない人間が一人でも増えていけば、ちよつとは世の中もマシになるってものじゃないの？ 私は本能なんか振り回されないわよ」

おそらくはカラ元気だろう。後で鏡を見れば、やはりシヨックは受けるのだろう。それでもここで、香は自分のプライドがどこにあるのかを宣言した。あの危機的な状況の時でさえも、「心の愛きょう」で勝負すると言った。

「ああ、そうだな。お前さんの言うとおりだ。俺達はあきらめちゃいけないんだ。あんたみたいな娘が一人でもいる限り。えらいぞ。よくやった。よく頑張ったな」
そういいながら、香の頭を子供のよ

うになでてやった。香はくすぐったそうな顔をしながら、礼似、御子、良平の顔を見回した。みんな暖かい目をしてくれていた。

「土間さんとハルオさんは？」二人がいない事に気付いた香が聞いた。

「二人とも外に出たわ。うまく話が出来ればいいんだけど」御子が心配そうに言う。ハルオにも土間にも急な展開だっただけに、二人の精神状態が心配だった。

そんな話をしているうちに二人は戻ってきた。香の姿を見て、ハルオは足を止める。罪悪感が表情に表れている。

それを見た香はつかつかとハルオの前に歩いて行った。

「あ、あの。そ、その。か、香さん」しどろもどろになったハルオを香は睨みつけた。

「ちよつと！ あんたのせいでひどい目にあつたじゃないの！」香はストレートにハルオを怒鳴りつけた。

「す、すいません」ハルオは消え入りそうな声で謝る。

「ごめんなさい、香。私達のせいでこんな目にあわせて」土間が慌てて謝るが

「土間さんは関係ありません！ 私はハルオさんに話してるんです。口を挟まないでください！」

関係ない事はないのだが、香の勢いに土間は思わず口をつぐんだ。「こつなつたら、あんたには責任とってもらいますからね！」

「せ、責任つて、い、いわれても」

「当面は私の家事当番は、あんたがやる事。何かあつたら礼似さんのアシスタント業務もね。当然でしょう？ 私、けが人なんだから怪我の保証はしっかりしてもらわないと」

「は、あ」ハルオは内心のがっかり加減が顔に出た。すかさず香は続ける。

「それから、私の怪我が良くなつたら、私に護身術を教える事。あんたにはこれから稽古に付き合ってもらおうわ」

「お、俺につて。俺、ま、まだ半人前ですよ。そ、それに香さんが、は、刃物を持つなんて」

「誰が刃物を持つっていった？ 私は刃物使いが大つきらいなの！ そんなもの持たなくったつて、身を守る方法は教えられるでしよう？ 出来るの？ 出来ないの？」香は一方的にまくしたてる。

「か、香さんは、お、俺が、ちゃんと守りますから」

「冗談！ 四六時中私を追っかけまわすつもり？ そんなのまるでストーリーじゃない。自分の身くらい自分で守るわよ。あんた私を馬鹿にしてんの？」

「そ、そんなこと、ぜ、絶対にありません！」殆んど反射的にハルオが答える。

「だったら、今から私達の部屋のお風呂を洗って沸かして頂戴ね。あ、部屋に行く途中で買物もするから、荷物持ちもお願い。病院と警察の後始末は、礼似さん達がうまくやってくれるでしょ。ああ、傷が痛む。帰るからさっさとついて来てよ」素晴らしいながら香はハルオを連れて帰っていく。土間は頭を抱えてしまった。

「土間、大丈夫？」思わず礼似が声をかけた。

「ああ、あれは私の血筋だわ。気の強いはねつかえりの娘に、まるつきり振り回されるのは。私の若い頃にそっくり。これは相当根深い事になりそうだわ」

「香もあの気性だからね。ハルオは相当こき使われそうね」礼似も啞然としている。

「ハルオに稽古を付き合わせるつて。こりゃあ、うちの組もしばらく賑やかになりそうだな」良平はやや面白がっている。人に教える事は自分が上達する早道にもなるだろう。これは楽しみだ。

「賑やか程度で済めばいいけどね」二人の様子を見て、御子は香がハルオを怒鳴り散らす姿が想像できてしまった。どうやら土間も同じらしく、御子と土間は目を合わせて軽いため息をつく。

「なあに。若い時はあの位の元気があつた方がいいもんだ。ああい

う子たちと付き合つと、こっちも若返つた気分になれるってもんさ」
どつちやら倉田が一番ほほえましく思っているようだ。

こっちはあの二人に、しばらく気をもむ事になりそうだと、土間、
礼似、御子は倉田ののんきさを羨ましく思ったのだった。

完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8627s/>

こてつ物語 5

2011年8月30日03時35分発行